



人間の幸福

印  
芹沢光海

新潮社

人間にんげんの幸福こうふく



平成元年 7 月 20 日 発行  
平成元年 9 月 25 日 4 刷

著者 芹沢光治良せりざわこうじろう  
発行者 佐藤亮一  
発行所 株式会社 新潮社  
郵便番号 162  
東京都新宿区矢来町71  
振替東京 4-8 0 8

---

● 価格は函に表示してあります ●

ISBN4-10-311330-8 C0093

印刷・二光印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り  
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

© Kojiro Serizawa 1989, Printed in Japan

人間の幸福



## 第一章

今年（一九八八年）の初めは暖かだった。間もなく寒もあけようというのに、一度も霜がおりなかった。

僕は長く懸案だった親神との約束の三作目の書下ろし長篇小説（『神の計画』）の最後の章の構成が出来て、安心して、或る日、昼近く久しぶりに庭に出たが、毛のスーターにそそぐ陽が、春のように暖かかった。

これでは、泰山木の横の地面には、いつもの野生のアブラ菜の芽が美しいだろうと、そちらへ行ってみた。

ところが、芽が生えているどころか、地面は荒れて、芽の生える気配さえ感じられない。思わず、そばの泰山木に声をかけた。

——なあ、アブラ菜の芽は、いつも、今頃美しい芽を出したのではないか。

返答がなかった。

——庭の主よ。今日も暖かではなかったな。あのう、そ鳥の運んでくれる菜の花は、今頃きれいに芽を出すのではなかったかね。

やはり返事がない。僕は泰山木のふとい幹を、そつと叩いて、呼んでみた。

——おい、どうした。まさか、こんな陽を受けたせいで、昼寝でもあるまいな。

そう笑って、そばの庭石に腰をおろし、暫く陽を浴びていた。右横の寒椿が恥ずかしそうに、赤い花をたくさん葉かげにつけていた。その時、思い出したが、一昨年の秋頃だったか、僕は庭の主に宣言したことがあった。

今まで、自分はよく庭で愚痴めいたことを、君に話したが、あれは神経衰弱のせいで、すまなかつたな。君はいつも相手になつてくれて、有難かつたが、君まで神経衰弱にしてしまった……自分は、ようやく健康な人間になつたので、庭に出ても、樹木に話しかけるような真似はしないから、君も、健康な樹木になつて、自分に話しかけるようなことは、してはいかんぞ……というようなことを。

それを思い出して、僕は再び泰山木の根もとにもどり、仰ぐようにして、話した。

——いつか、神経衰弱のように話すことはやめようと、言ったことがあつたな。それを、一年半近く守つたが……おたがいに、健康な心になつたのだから、これからは、又のどかに話しあうことにしようや……あの、毎年うそ鳥の運んでくれる菜の花の芽が、もう出る頃ではないのか。

そう優しく話しかけて、待つたが、答えがなかつた。その時、不思議なことに驚いた。いつも、あの大きくて厚い葉が梢に繁茂して、そこから空のかけらものぞけないのが、坊主刈りでもしたように樹葉がまばらで、青空がまる見えだった。これは……泰山木は病氣でもしているのか、寒しいし、答えないのも、無理はないと思ひ、書齋へもどることにした。玄関前に来ると、紅梅の老樹が呼びとめた。

——先生、自分がお話してもいいですか。

——いいとも、何でも喜んで聞くよ。

——あの、泰山木はおこつて、答えないのですよ。

——おこっているって？ 誰に……何を……いつから……

と、きいた。梅の木はためらっていたが、決意でもしたように、言った。

——先生、みんな聞いて下さい。去年の秋、庭師さんの仕事がすんで三日目に、泰山木が自分に申しました。もうこんな庭なんか、どうともなれだ。庭の主もごめんこうむるが、他の木が可哀相だから、自分に庭の主になって、面倒みてやってくれてね……自分は泰山木より齡上だし、代つて庭の主になつてもいいが、一体、なぜ、そんなにおこるのか、きいたのです。聞いてみると、おこるのも無理ないと、同情して、自分は、その申し出を引受けて、今日まで来ましたが……

——その、おこっているということを、聞かせてくれんか。

——それが、難しいことでおわかりいただけますか。彼には大事件だが、先生方には、何でもないことかも知れませんから。

——面倒なことらしいが、勿体ぶらずに、話したらどうだ。

——先生、去年の秋、庭の手入れの時、先生は庭師に命じたそうですね。裏庭の樹木には鉢も入れないで、自然のままにしておいてくれて……ほんとうですか。

——うん、儉約するつもりで、裏庭には手を入れないことにしたので、な。

——それを聞いて、泰山木は、庭の主として、喜んだそうですね。樹木も自然のままであるのが、一番幸福だということが、先生にも、やっと解つていただけだと思つて、ね。だから、表庭の方の樹木の扱ひも、これからは、ちがうだろうと、期待したそうですね……

——そう紅梅は言つてから、一寸考えていたようだが、すぐ長々と話し出した。



それによると、僕が焼跡にこの家を建てた時、庭造りにかかって、泰山木も紅梅も、その時庭に植えられたが、世話をした植木屋の親子が、二人とも、自然や樹木の心のよくわかる、いい庭師だった。

二年ばかりして親爺の方が亡くなると、息子は、父親の分まで世話しなければと言つて、強風だとか、豪雨だとか、何かあると必ず駈けつけて、いろいろ庭の仲間の面倒を見てくれた。おかげで、紅梅は老いばれて、根元から幹まで、空洞のある衰えた老体が、倒れもしないで、まるで蘇生したように、新しく何本も脇枝をのぼして、花をつけるようになった。あの二人こそ日本の庭師というのだから、残念なことに、息子の方も、思いがけなく早死にしまつて……それから、何人か庭師がかわつたが、どの人も、皆、素人の庭師ばかりで、樹木達はへこたれていたところ、最後に、今の若い庭師になつて、それが、庭師の専門学校出というので、樹木は怖れをなしたものの、新時代になつたというのだからと、期待もした。

ところが、学校出の庭師は職人を一人つれて、九月と寒中と年二回庭へ現れたね。九月には、樹木の手入れに五日間、寒中には寒肥をやり二日間……そのやり方が、それまでの庭師と全くちがうので、びっくりした。その若い親方は樹木の手入れに、植木鉢を使わずに、電気機械でやるのだ。常緑樹はみんな、まるで人間社会の散髪屋で、電気バリカンで頭を刈るように、小枝や樹葉を、電気機械で刈るので、仰天した。ただ泰山木と東側の古檜の二本だけは、余り背が高いので、機械を使うのが困難なのか、難を逃がれたが、常緑樹は赤芽檜はじめ、みなその電気機械にかかると、いつも辛くて泣いた。その結果、学校出の庭師になつて、何年目か、どの常緑樹ももとの型をなくして、まるく球状になつてしまつた。人の目には美しいかも知れんが、悲しいかな、これは、不自然である。紅梅や木蓮のように、冬に葉を落すものは、親方が関心がないよう

で、昔流の職人に委まかせているので、その電気機械の難をまぬがれて、もとのまま安泰だ。

寒肥についても、以前は寒肥などと、尤ももらしいことはしないで、庭師が来た時、肥料を欲しがっている樹には、裏庭の横の枯葉や雑草の堆肥場から、堆肥を運んで、ほどこした。しかし、今度の親方は、一切堆肥を使わないで、化学肥料といって、いろいろな薬を、どの樹木にもみさかいなく、ふんだんにやっている。薬といえば、庭の手入れが終ると、いつも、庭中に、雑草が生えないようにと強い薬をまきちらし、害虫が来ないようにと、有毒薬をまく……こんなことを、庭の主だった泰山木は、不自然だといって、いつも心配し、樹木達に相談した。しかし、立派な先生がついてるのだから、安心していようと、いつも泰山木をなだめた。

ところが、去年の九月、僕が、裏庭の樹は自然のまま、手を入れるなど、庭師に命じたところを知って、泰山木は喜んだ。僕が自然のありがたさに気付いたので、表庭の樹木にも、不自然なことは避けて、自然にもどすだろうと、泰山木は言うし……庭の樹木もみんなも喜んでいたが、庭師のやることは、少しも変らないものの、いつも通り庭仕事がすんだので一安心したところ、翌日も、職人と二人で来て、泰山木に長梯子ながはしをたてかけ、大切なあのみごとな葉を、機械でなしに、鉋のこぎりや鋸のこぎりで、茎こきりもとから一つ一つ無造作に切りおとして、坊主にしてしまった。その翌日には、東側の古櫓が同じめにあつた……

——これでは、自然にもどすどころか、泰山木がおこるのも、無理ありませんが、あれは、先生が命じて、させたのですか。

と、紅梅は真剣に問いかけた。

——いいや、何事も専門家に委せることにしているので、庭のことも専門家の庭師に委せているのだが……

——先生が命じて、させたことではないですね。

——あの頃、第三巻目の仕事におわれて、庭師のいる間、一度も庭へ出られなかつたくらいだからな。泰山木には、気の毒なことをした。

——先生、そのお言葉をうかがつて、安心しました……このままお部屋にもどられて、午後、又庭へお出掛け下さい。その間に、自分は泰山木を慰め、ゆつくり話しあつておきますから。どうぞ、先生、泰山木と話しあつて、もとのように、理解しあつて下さい。それでないと、仲間がみんな安心できませんから。

——解つた。頼むよ。

そう言つて、僕は書齋にもどつた。

書齋の窓から、泰山木が見えたが、坊主頭の大樹は、言われてみれば、寂しく不幸そうだった。このように彼を不幸にしたのも、わが卑しい貧乏根性のせいだったと、僕は悔恨がつきあげた

去年の九月、庭師が来たのは、末の娘がスーダンに発つてから三日目だった。娘の夫がスーダンに転任することになって、一人の孫娘をつれて夫婦で一カ月ばかり、わが家に滞在した。その間、僕は三女と中軽井沢の山小屋で夏を過したが、娘夫婦は滞在中、風呂場を改造したり、いろいろ屋内を修理したが、費用は勿論僕の負担であつたが、老いて収入の少ない僕には、重荷だつた。庭師の来た前日、中野区から福祉年金をもらった。少額でも、思いがけない福祉年金はありがたかつた。

しかし、翌朝、庭師の顔を見ると、その倍近い金額を、庭師に払わなければならぬことが、

胸に来て、福祉年金をもらう身分で、植木屋に庭造りさせるなど、もつてのほかのことだと、ケチな根性が激しく動いた。それ故、儉約するつもりで、裏庭の樹木は自然のままにして、手を加えないように、庭師に話したのだった。その時、僕のところは淋しくなつて、生活上重要でないことから、少しでも儉約せざるを得ないからと、話せばよかつたが、見栄坊で、そう言えなかつた。

庭師の方は、いつか話していたが、最近東京では、庭のある家が少なくなつたので、きちんとした得意先だけを、大切にするために、年間計画をたて、何家には何日頃幾日間ときめて、迷惑をかけないようにしているとのことだ。それ故、僕の処へは、九月十日頃五日間と予定をしていたので、裏庭の樹木の手入れをしないからとて、三日か三日半で、すべて終つたとして、引きあげられなかつたのだらう。それは、一日か一日半の失業になるので、その一日か一日半かけて、泰山木と東側の古櫨を、丸坊主にしたのであろう。

言い換えれば、僕のケチで見栄坊の卑しい根性が、殿様のような泰山木と古櫨とを、哀れな丸坊主にしたのだ。特に、泰山木は氣位が高いといわれるが、アメリカの有名な小説『風とともに去りぬ』の女主人公、スカーレット・オハラは、泰山木の花のイメージだということであるが、その大きな白い花は、氣品があり、芳香を放つて美しい。しかし、泰山木自身が、部厚で大きくて輝く樹葉をふんだんにささげ持つて、堂々たる大樹であるために、アメリカでは、最も愛されて、公園に植えられているとのことだ。この樹を、僕も表庭に植え秘かに自慢し、大切に、庭の主にも扱つて来た。それを、このように雑木のように丸坊主にされては、泰山木が權威を失つたように、憤るのも無理もないことだ。僕は書齋の窓から庭の主にも目をやつて、秘かに詫びたものだ。

その午後、庭へ出た。玄関を出ると、すぐ老梅が元気に呼びかけた。

——先生、ご安心下さい。泰山木は機嫌をなおしましたから……

——それはよかったです。有難う。

——あの、その前に、お耳に入れたいことがあります……と、老梅は僕を引きとめて、もつともらしく言い加えるのだった。

泰山木が気に入らないのは、庭師が前から庭の常緑樹をみな、どれも刈りこんで球状にしてしまったことだった。そのことについて、紅梅は午前中かかって説いて、ようやく納得させた。紅梅は戦前、一キロばかり先の華州園の丘の上の、伯爵家の裏門に植えられていたが、伯爵家の広い庭園の常緑樹は全部、このと同じように球状に刈りこまれていた。それは、先代が明治のはじめに、ヨーロッパに留学中、フランスの庭園の美しさに感心して、帰国するなり、わが庭をフランス風にしようと、苦心の末に、完成して、ご自慢の有名なものだった。その伯爵家も、戦争中に空爆で焼失し、戦後になって、広くて美しかった庭園も、分譲地になってしまった。

ところが、このわが庭の現在の様相は、小さいながら、あの伯爵家の庭園の面影があつて、ミニ伯爵庭園だと、紅梅は秘かに誇っているが、それは今の庭師が、さすがに専門学校出だけあつて、外国風の庭園をつくる技術をもつおかげで、こんなハイカラな庭をつくれたのだ。それに、僕も長くフランスに留学したので、この庭の美しさを喜んでいるのだから、泰山木が不平を思つたら、この庭にはいられなくなる……と、話したところ、納得したが、その時もう一つ大切なことを、泰山木が申し出たと、紅梅はなおも加えたのだ……

伯爵の庭園でも、泰山木や古榿のような大樹は、決して刈りこんで、坊主にしなかつたから、今度の二本の樹木の場合は、あの庭師のあやまりだから、将来再びこんなことをしないよう、僕

に注意してもらいたいと頼んだと。それから、紅梅や木蓮のように、花をつける樹木は、伯爵の庭では庭木ではなくて、雑木だと軽視されていたから、紅梅は庭の主になる資格がないので、辞任するから、泰山木に機嫌をなおして、今まで通り僕と話しあえる庭の主になってくれと、頼んだ。すると、泰山木も承知したから……もう大丈夫だ……と。

——そうか、ご苦労さんだった。

そう言つて、僕も泰山木の方へ行つた。そして、すぐ仰ぐようにして話しかけた。

——やあ、すまなかつたなあ、うっかりして……

——先生、そのことなら、紅梅の奴こいつに、さんざん話を聞かされましたから、もう、いいです。

——よかつた、機嫌をなおしてくれて……

——先生、横の山茶花さんざんかの奴を見て下さい。此奴は戦前から此処こゝで立派に育つて花をつけていたのに、戦争中空襲で焼かれて、枯死したものと考えられたのに、翌年には、枯れた根もとから芽を出して蘇生したそうですね。先生が焼跡のここに、お宅の建築をはじめた頃には、背丈も三メートル近くなつていて、建築業者たちは、材料を運び入れるのに邪魔になるから、切りすてようとしたが、切りたおすのも面倒だとて、虐待したそうで……お宅の完成後、庭造りにかかられて、自分がここに移植されて来た時には、この山茶花君は、見るもあわれでしたよ。自分も殆ど同じ不幸にあつて、お庭にご厄介になつたので、たがいに同情しあつて、ともに励ましあつたものです。幸運なことに、あの頃の庭師さんが、親子とも、旧式な日本の職人さんで、助かりました。それで此奴も自分もすくすく元気に生長して、立派に一人前になつて、美しい花を咲かせました。特に、此奴の純粹な白と薄紅色の二種類の花が、人目をひきましてね。花時に訪れるお客は、みな正門をはいつたとたん、山茶花の美しい花にみとれて、大きく息をしながら階段をのぼつたも

のです……あの二十年ぐらいは、天下太平で、自分達みんな、幸せでしたが、あの親子の庭師が亡くなって……今の外国風な学者の庭師になってからというもの、常緑樹の仲間、ハイカラな外国風にするといつて、みんな球状か円筒形に刈りこまれてしまひましたね。気の毒なことに、此奴も花をつける重要な枝を遠慮会釈なく切りすてられて、こんな不恰がかつろな形にされてしまつてね……可哀相に、恰好は我慢できても、これでは花を咲かせられない無能力者にされてしまつたので、花時には、此奴は独り泣いてるが、誰も気がつかないしまつて……

——そうだったか。わかった。それなのに、今度は、君まで丸坊主にされてしまつたのだからな。ごめんよ。

——そのことは、紅梅とよく話したから、もういいです。それで、先生に聞いてもらいたいことがあるが、いいですか。

——いいとも……

——自分達樹木は、自然のめぐみで生きています。ですから、庭師さんの扱ひも、自然のままのようにして、欲しいのです。その点、亡くなった親子の庭師は、旧式だったかも知れませんが、自然をわきまえて、自分達には、いい庭師でした。それに反して、今の庭師は、学者で新式かも知れませんが、人工的で、自然を無視しています。いいえ、先生、今の庭師を非難しているのではありません。去年の九月、先生は庭師に命じて、裏のお庭に手を入れないで、自然のままにしておきましたね。今年の九月、庭師が庭の手入れに来るまで、先生、自然のままにした裏庭と、人工的にした表庭とを比較して、いろいろ観察して下さい。そのために、どんな変化が起きるか……それを、お願いしたかったのです。そのために、今寒中で、庭師は例年の如く寒肥をすと言つて来るかも知れませんが、こんな暖かな時に、金肥きんひをほどこされたら、毒をかけられるようなも

のですから……やめさせて下さい。金肥というが、いく種類も、まるで人間のお医者さんのように、たくさん薬品をくれるので、自分達は薬の副作用に苦しむのですから……

——うん、わかった。

——これで、安心しました。……先生、ごらん下さい。自分と古樫とが丸坊主にされたために、小鳥共が来なくなりましてね。梢に葉かけがなくて、身をかくすところがないからか、自分も古樫も一心に小鳥を呼ぶけれど……雀さえ来てくれません。今朝、先生、菜の花の芽が出ないか、おたずねでしたけれど……今年はず、鳥が菜の種子を糞ぐんに入れて、自分の処に運んで来てくれませんか、菜の花は、今年は咲きません……

——そうか、これから、君が言ったように、よく観察しよう。そうだ。君は今迄どおり、庭の主になつてくれるのだろうか。

——そのことですが……紅梅の方が齡上ですから、主になつてもらおうとしたけれど、仲間の奴等が、紅梅は新庭師の被害者でないから、理解がないとて、反対しますし……さつきも、紅梅が熱心にすすめたので、庭の主を引受けましたが、皆喜んだので、その時、先生に頼んだことを、みんなに話して、賛成してもらいました。みんな喜んでいましたから、先生、お願いしたように、九月まで表庭と裏庭とを、よく観察して、自然の大切さを、認識して下さい。

——うん、よくわかった。

そう言つて、僕は泰山木をはなれたが、樹木の世界も、人間の世界に等しいのかと、初めて知らされた想いだつた。

裏庭と表庭とを比較観察すると、約束したからとて、そんな心の余裕は、僕にはなかつた。



ただ、二階の書齋の南側が、大きな硝子戸<sup>カラス</sup>をへだててベランダであって、ベランダに出れば、部屋のなかからも表庭がよく見える。書齋の北側は広い硝子窓で、机に向っていても、左側に裏庭が見える。それ故、意識はしなくても、ふと双方の庭を見ることがあった。

裏庭は、実は狭いのだが、二千坪ばかりの隣家の屋敷跡の土地と、低い盛土をさかいに、地つづきのために、広いような錯覚をする。

隣家は皇室に関係深い侯爵家のお屋敷であったが、空襲で焼失して、敗戦後、物納したのを、払下げの際に、誰かが安く手に入れたというが、買主は四十年以上も、どうした訳か、その土地を利用しないで放置していた。一年ばかり前から、表の道路に面した数百坪を、少し手を加えて自動車の駐車場にした。しかし、僕の裏庭につづいたところは、そのまま残されて、野生の雑木が繁茂しているので、現在も裏庭は広いようで、助かっている。わが窓からは見えないが、その表道路のそばに、一本の大きな榎の老樹が、空襲をのがれて健全で、今なお、巨大な梢を高くとひろげて、街道を通る車や人間を見おろしている。

この老樹は、僕の親しい友で、三、四年前まで散歩の帰りなど、その空地の正門からはいつては、徳川時代からの、老樹の生涯や土地の歴史などについて、よく話を聞いたものだ。「或る詩人と老榎との対話」と題して、書く約束をして、まだ果していないが。この老樹の梢には、いつも、さまざまな小鳥が群がっていて、賑かであった。何処<sup>どこ</sup>からか、群をなして渡って来る小鳥は、みな次に僕の表庭の泰山木の梢にとんで来たようだった。あの菜の花の種子をはこぶうそ鳥の群が、この老樹の梢に来た時、菜の花を咲かせるのは、僕の庭の方が適しているからといって、泰山木の梢へよこしたと、僕に打ちあげたことがある。

そんなわけで、僕は書齋にあっても、見るともなく表庭と裏庭とに目をやって、丸坊主にされ